ウイリアム・マルクスのコレージュ・ド・フランス就任講義を読む

伊藤 達也

The World Library as an Alternative to the World Literature: A Reading of William Marx's Inaugural Lesson at Collège de France

Tatsuya ITO

はじめに

二〇二〇年一月二十三日、ウイリアム・マルクスのコレージュ・ド・フランス就任によって[1]、フランスは、ロマン主義期のドイツに誕生し、先世紀アメリカ合衆国で今日理解される形に成長したように思われる「世界文学」を対象とした、独自の研究・教育活動を始めることを公式に――ただしウイリアム・マルクスの個性的な視点と責任を通じて――宣言したと考えてよいだろう。それがどのようなものなのか、コロナ禍の只中に読み上げられた「世界図書館に生きる」と題された「就任講義[2]」から理解しようというのが本論のねらいである。

コレージュ・ド・フランスの「就任講義」とは、就任後の第一回講義のことであり、任命された教授はそこで今後展開される研究プログラムを発表する伝統になっている。講義原稿は必ず出版され、有名なものとしては、ミシェル・フーコーが一九七〇年「思想体系の歴史」の教授に就任した際の『言説の領界』（慎改康之訳、河出文庫）、またそのフーコーの推薦によって一九七七年「文学の記号学」担当に就任したロラン・バルトの『文学の記号学』（花輪光訳、みすず書房）、などがあり、いずれも一時間ほどの口頭発表を文章にしたもの、あるいは口語として読まれることを前提に執筆された文章であり、比較的コンパクトな中にエッセンスが詰め込まれているため、門外漢にとっても難解な思想を理解する格好の手がかりとなっている。

複数形の比較文学

ウイリアム・マルクスの講座は「比較文学」と題されているが、すでにこの単純な講座名に工夫が凝らされている。彼の「比較文学」は複数形で Littératures comparées と記されており、そこに冠詞を付すとすれば不定冠詞の複数形 des であることが講義の中でも明言される。

私は［…］、この講座のタイトルが単数定冠詞付きではなく、複数不定冠詞付きの「文学」の比較となることを強く求めたのです。まずなによりも多様性を重視すべきです。言語的な多様性だけでなく――それだけではあまりに狭く単純な定義でしょう――文化的そして人類学的な多様性です。（四十一）

このような意図を持って作られた講座名をあえて日本語に翻訳するならば、「比較された様々な文学」となるだろうか。一般的には単数形で La littérature comparée となるところをあえて複数形で書くところに、ウイリアム・マルクスによる伝統との決別の意図を見てとることができる。それは二重の伝統との決別と言っても良いかもしれない。一方で、影響関係の研究に終始するフランス式比較文学の伝統、他方で言語・民族ごとに研究対象を規定してきた伝統的な文学研究への決別である。

半世紀以上もの間、大雑把に申し上げれば一九五八年にチャペルヒルで実証的モデルつまり事実関係や影響関係に重きを置くフランス流の比較文学の信奉者たちと、より理論的そして一般的な性質を持つアメリカ流の比較文学の信奉者たちとの論争以来、この分野は絶えまない定義の問題に陥っているように思われます。（二十二）

「フランス文学」や「イギリス文学」あるいは「中世文学」であれば、人々はおよそそれが何か理解できます。しかし「比較文学」とは何でしょうか。一体何と「比較」するのでしょうか。私は家族や隣人から真摯な好奇心とともによくこのような質問を受けます。私は丁寧に答えようと試みます。それは文学が「それ自体と比較」されることです。あるいは、他の文学と、または「様々な文学の中で互いに比較」されることです、と。補語なしで使用される形容詞「比較」の絶対用法は空隙を、根本的な欠落を開きます。それを比較文学者たちは必死になって埋めようとするのです。（十九）

ではウイリアム・マルクスの考える複数形の比較文学とはどのようなものなのだろうか。彼は自らの考える比較文学を次のように定義している。

私は本日最後の怖じ気を振り払って、私の考えの根本を語りたいと思います。それはやや唐突かもしれません、もしかすると皮肉に響くかもしれません。私にとって、ある意味で、

比較文学は存在しないのです。なぜならそれは、私の目には、制限なしに文学を研究すること、ただ単に文学の研究とのみ呼ばれるものに与えられる名前であるからです。（二十四）

[…] 厳密には、国民文学を国ごとに研究する方にこそに正当化の理由が必要なのでないでしょうか。むしろその広い視野が一般読者が翻訳によって均質化された読書の起源など気にも留めないという日常の実践に対応している比較文学の方にはその必要はないのです。（三十一）

「比較文学は存在しない」という言葉で不意打ちしながら、マルクスは彼の考える「比較文学」こそが、「文学」そのものだと宣言する。しかしこの「ただ単に文学の研究とのみ呼ばれるもの」、「あらゆる制限を設けずに文学を研究すること」は伝統的にさまざまな制限のもとに置かれていた文学の研究を超えたパラダイムを誕生させることであり、場合によっては、根拠を持たない方法論、絶対的な「自由」の乱用ともなりうる。ポール・アザール、ポール・ヴァン・ティーゲム、ジャン・マリー・カレなど、過去においてフランスの比較文学者たちによって繰り返されてきた議論（その多くが、影響関係を持たない対象を恣意的に比較することへの戒めであった）をよく知る「比較文学者」マルクスはそのことを十分に理解した上で、対象に行使される自由を、文学以外の領域にまで拡大することで、過去の議論を一挙に乗り越えようとする。

もし比較文学の様々な分野に制度的な統一性があるとすれば、それはまさに、自由の保障の中にあります。文学の全て、そしてあらゆる種類の文学に興味を持つ自由、全体としてまたは個別的に、そして近くからあるいは遠くから文学に関係するあらゆるものに興味を持つ自由。宗教や思想など文化や社会を構成するあらゆるものに興味を持つ自由です。後はこの自由はどう行使するか次第です。（二十五）

このように絶対的な自由を宣言した上で、いわば確信犯的に、マルクスはこのフランスの知の殿堂にそれまで禁止され続けてきた絶対的な自由を密航者さながらの手際で侵入させる。

比較文学は分野なしの学問分野です。それゆえ、私はコレージュ・ド・フランスがこのような自由な空間を私に提供してくれると理解した瞬間、その熱意に身体が震える思いでした。近いうちに、歴史家や哲学者、民俗学者である同僚が、この高貴な学舎にこれ程までに制御不能な好奇心を導入したことの危険性に気づくだろうと私は確信しました。彼らがどのような盲目の犠牲者だったかは分かりませんが、今私はテーブルのこちら側に移ったのですから、彼らが思い込みから目を覚ましたとしても何も怖いものはありません。（二十六）

恐るべき大胆さで学問の密輸を遂行するウイリアム・マルクスとは一体何者なのか。ここに彼の経歴を簡単にたどってみることにする。[3]

ウイリアム・マルクスとは何者か？

ウイリアム・マルクスは一九六六年に南フランスのプロヴァンス地方、中世の町並み残るヴィルヌーヴ・レザヴィニオンに生まれ、マルセイユのリセを経て、高等師範学校に進学。一九八九年に古典文学でアグレガシオン（教授資格）を取得、二〇〇〇年、博士論文『形式的批評の発明（一九二〇―一九四五）：T・Sエリオットとポール・ヴァレリーをめぐって』によりパリ大学ソルボンヌ校から比較文学の博士号を授与されている。ギリシア＝ラテン文学を専門とする古典教育を修めつつ[4]、同時にドイツ、フランス、イギリスの近代文学をもよく知るマルクスが博士論文において選んだテーマはエリオットとヴァレリーという二人の近代詩人・批評家の「比較」を通じて近代における形式的批評の誕生を扱うことだった。博士号取得後はパリ大学ナンテール校で「比較文学」の教授となり、今回アントワーヌ・コンパニオンの推薦により、コレージュ・ド・フランスの「比較文学」の教授に就任した。この経歴だけを見ると、伝統的な文学研究への決別を宣言する素地は見出せないようにも思える。

しかし彼の比較論の独自の展開には大きな個人的転機が関係している。ウイリアム・マルクス自身が就任講義の中で語るように、彼の二年間の日本滞在である。マルクスは一九九六東京で開催されたヴァレリーをめぐる研究集会に参加したことを契機に日本を発見し、翌年から二年間京都大学で教育・研究生活を送っている。そこで発見した日本の「能」や「舞踊」、また日本や中国の文人思想との出会いが、彼をしてヨーロッパの文学や芸術とその外部、つまり直接影響関係がない文明における等価物との比較の可能性に目覚めさせたのである。

> 私の文学への人類学的な問題提起の意識はおそらく私が学んだ古典教養、そしてまた日出づる国つまり日本での生活体験に大きく負っていると告白しなければなりません。人は神社での能や儀式的な舞の上演に立ち会って冷静でいることなどできません。（四十一）

しかし自分を取り巻く文学、そしてそれに対する制度への違和感はすでに古くから彼の中に芽生えていた。ヨーロッパの他者としての日本発見以前に、彼の伝統的な文学教育に対する強い違和感は、実際には高校時代にまで遡るものであった。就任講義は以下のやや唐突な告白から開始されている。

> ながいあいだ私は文学に興味をもてませんでした。高等学校（リセ）ではラガルドとミシャールによる有名なフランス文学の教科書の謎のような設問（「詩句六一行目から七六行目に見られるラシーヌ的情熱の主要な特徴を述べよ」「この詩（ソネ）におけるボードレールの技法の特徴は何か」[5]）が何を求めているのか理解できませんでした。私は注釈（コマンテール）や小論文（ディセルタシオン）の仕組みをつかめませんでした。結局のところ私は文学についての言説（ことば）が何の役に立つのか判らなかったのです。（二）

この感情は教授資格試験（アグレガシオン）まで続き、この疑問を自分の研究の基礎に据えようと決意した日にはじめて解放されました。狂気じみた傲慢さにとりつかれていた私は、私と文学との問題はおそらく文学の問題そのものにほかならないと悟り、自己と和解したのです。そしてもしかすると今日私が皆様の前に立っているのは、このような疑問を徹底的に考えぬいたことが理由かもしれないのです。（三）

視点の外部性を確保すること、それこそがウイリアム・マルクスの考える比較の方法論の根本である。「比較」の方法論とはまさしく様々な文学が相互的に比較され、国籍や時代に帰属しない作品自体の固有性において作品が読まれること、それこそがマルクスの考える（比較）文学の姿である。またそれは同時に何を「文学」と呼ぶのか、何が文学を構成するのかという文学の定義も根本から揺さぶるものとなる。

場所や時間の限定を持たず、複数形で「比較文学」と題された本講座では、一つの問題、文学それ自体の問題、その本質、その資料体（コーパス）、その機能、そしてその歴史的、文化的可変性の問題をめぐって探求がなされるでしょう。そのためには断固として文学を外部から、あらゆる暗黙の了解の外側において、文学の諸理論の歴史という枠組みの中で文学へのあらゆる命題を復元しながら思考することがふさわしいでしょう。ここでいう文学の諸理論の歴史とは、文学の様々な概念や様々な想像物の歴史という意味で理解され、最終的には、諸文学――あるいは同一の社会または多様な社会の中で、慣習や言葉の便宜によって遡行的に私たちが現在「文学」という名の下にまとめている継続的あるいは同時多発的な対象――の歴史のことを意味します。（四十二）

ところで［…］文学の主要な問題は文学それ自体です。つまり歴史的に定められ、地理的に位置づけられたあらゆる含意と前提を含んだ文学の概念自体にあるのです。大雑把に申し上げるなら、過去二世紀のヨーロッパです。歴史的に位置づけられた私たちの文学への愛は、逆説的ながら、最初の義務として私たちにまさにこの文学の歴史性からの離脱を強います。文学の名において、私たちはそこから自らを引き離さなければならないのです。（六十七）

「世界図書館」と「世界文学」

文学の外側にあり文学を成立させているレフェランスの総体をマルクスは「世界図書館（bibliothèque mondiale/bibliothèque du monde）」と名付ける。この馴染みのない表現は「世界文学（littérature mondiale）」から影響されているに違いないが、マルクスはその両者をはっきりと区別している。

そのような訳で、世界図書館あるいは普遍図書館――私は世界「図書館」と言い、世界「文学」とは言いません――を一挙に構築し、探索しなければならないのです。私たちは世

界文学を読みますが、世界図書館の中で読むのです。私たちは世界図書館に「生きて」いるのです。両者の態度は決定的に異なります。（六十八）

「読む」は、語源的には legere 集めること、選ぶこと、閲覧することです。それは図書館の中から選びとることを意味します。私たちは皆自分の中に、文学的テクストに意味を与え、その意味を同様に閉じ込めてもいる、無意識の図書館、精神の図書館、目に見えない図書館を持っています。したがって正典（カノン）から、図書館から逃れられると考えるのは幻想にすぎません。別（他者）の図書館のみが、図書館から私たちを解放してくれるのです。見慣れたものからの離脱はこの新しい図書館から始めなければなりません。続きは言わずもがなです。そこから大西洋の向こう側で盛んな正典戦争（カノン・ウォーズ）の素朴さが現れます。正典は避けることができません。それはなにひとつ完璧なものではありません。正典を別の正典で置きかえてはならないのです。むしろ正典を複数化し、重ねあわせ、並立する複数のやり方を使って、記録し続けなければならないのです。（六十九）

「正典」の問題を例にとりながら、マルクスは「世界図書館」と「世界文学」を対立させようとする。ここに至ってアメリカ流「世界文学」に対してフランス流あるいはウイリアム・マルクス流の「世界文学」のあるべき姿が描かれ始める。マルクスは現在「世界文学」と呼ばれているものに批判を加えたのち、彼の「世界図書館」という考えを打ち出していく。

世界図書館の考えを推し進めていくと、まさしく世界遺産の泡、究極の受賞作品群、あるいは至高の正典として浮遊する「世界文学」と真っ向から対立することになります。それが文化の移転と文学の世界化のメカニズムの、距離を置いたあるいは純粋な研究でない場合、今日グローバル文学と呼び直された世界文学は、実際には支配的なあるいは新興勢力のせめぎあうテクスト間の熾烈な競争を意味します。それまで未知だった文学への好意的な評価は、ヨーロッパ文学の事実上の弱体化にしばしばつながります。ただし英語圏の特権だけは保たれ、とりわけ多様性を唯一要約でき、それを体現できると主張する国の特権だけは維持されます。特定の視点を廃棄するという主張は、客観的な中立性のもとに、文化的言語的帝国主義に滋養を与える支配的視点を拡大させる危険となります。多様性を推進するふりをしてそれを消し去るという権力による究極の策略です。（七十）

一九九〇年代から三十年続いたグローバリゼーションが押し進めたあらゆるものの商品化の中で、全世界的にマイナー言語で書かれた作品を英訳で読むことが加速し、英語の中にすべての言語作品が飲み込まれていくこととなった。[6] マルクスの講義では北米地域の特権性の維持、マイナー言語で表現される文学への評価（やがてそれは英訳されることになるのだから）による、ヨーロッパ文学の相対的な価値低下など現代に至るまで文学の世界化がもた

らした状況は批判の対象としている。実際には文学の商品化に過ぎず、作家たちがその最大の犠牲者でもある、世界商品を探しあてる熾烈な競争でしかないグローバル文学あるいは「世界文学」に抗しながら、ウイリアム・マルクスは「世界図書館」という概念を打ち立てる。

世界文学は不朽の名作や代表作を賞賛しますが、世界図書館は「マイナー」作品や忘れられた作品を無視しようとはしません。世界文学は翻訳を越えて生きのびる作品を選びますが、世界図書館は、翻訳の試練に耐えないテクストに興味を持ちます。そのようなテクストこそが他者性をより強く封じ込めていると考えるからです。実際は単なる現在中心主義にすぎない世界文学は、肥大化した集団的眼差しのためのテーブル（[身の丈を刈り取る] プロクストのベッド）にテクストを広げ、正当なあるいは偽の優越感で膨れ上がったその場限りのイデオロギーあるいは倫理的な要求にテクストを従属させます。ところが世界図書館では、文献学に支えられながら、個々のテクストをその特異性において、そのテクストが出現した時代や文化において読むのです。世界文学はすべてをその欲望や思考の枠組みに還元しようとする主体を優越感に浸らせますが、世界図書館は読者を変革し、その中心をずらし、その存在を刷新します。（七十一）

マルクスはもちろん翻訳による文学の鑑賞を否定しないが、[7] 他者性を含んだ、作品のオリジナルの輝きを鑑賞することこそを作品鑑賞のあるべき姿とみなしている。マルクスは、「世界文学」とは、実際には翻訳を通じても読者を獲得できる一般的興味を刺激する作品であることを指摘しており、現行の「世界文学」の有様を必らずしも肯定しない。むしろ複数形の「比較文学」を通じて、翻訳に抗う作品を、十九世紀にさかのぼる文献学の方法論を用いて、たとえ翻訳を通じてであっても、作品の出現時にもどしながら鑑賞し、その作品との出会いが読者の変革へとつながる可能性を目指すのである。これが世界図書館の中で「読む」という言葉の意味であり、ウイリアム・マルクス流の比較文学の実践である。

別の言葉で言えば、それは「読む」ことの徹底化と言っても良いかもしれない。他者としてのテクストをできる限り厳密に読むという態度を徹底させることは、特定の主体を脱することであり、関心の対象の科学的分析を目指す文献学的（philologique）あるいは言語学的（linguistique）態度をとることにつながる。しかしウイリアム・マルクスのユニークな点は同時に美的対象から受ける素朴な感動を肯定していることである。

比較文学の目的は、テクストに対する冷徹な分析ではなく、安易ではないやり方で作品と正しく出会い、鑑賞者の心が揺さぶられることを否定しないことである。そこが文献学、言語学と比較文学との大きな違いである。比較文学は「作品」の存在を前提とし、その解釈者への働きかけも学問の対象とする。分析対象に審美的な価値を認めない文献学や言語学の態度とはその点が根本的に異なっている。

[…] 文学研究は一方では社会一般についての学問と同じよう

に人間の精神、その言語的、象徴的、想像的活動についての知的発展を求めます。しかし他方では美的な欲求を満たすものでもあります。それは趣味や快楽と関係し、文学への愛こそが文学研究の第一の推進力です。人は同じ理由によって癌や第二次世界大戦の惨事を研究することはできません。この特異な動機だけでも文学研究を芸術一般の研究と同じように他の学問から区別するには十分です。（四）

ところで文学研究のこの根本的な二つの野心、認識論的なものと美学的なものは必ずしも折り合いません。例えば文学の中にある、最高の美、最高の作品を学び称賛するために選ぶことへの誘惑と、現実を最も適切な道具で偏見なく、最も精緻にそして完全なやり方で記述する認識論的な使命とを折り合わせることなど可能なのでしょうか。私もその一人である文学者はこのように根本的な不安定さを、つまり選ぶことと全体性との、文学的な美の体験への参加と体験の客観化との、すなわち誘惑と解剖とのたえざる葛藤を生きています。（五）

美の体験

実際、ウイリアム・マルクスは講演で幾（いく）つかの詩（エレディア、リルケ、キーツ）を引用している。なかでも最も重要な作品は、全文が引用されるエレディアの十四行詩「征服者たち」であろう。就任講義においては、極めて異例なことに、講演の冒頭において、この詩の全文をマルクス自ら朗読しているのである。このように、この詩に与えられた例外的な重要性を考慮しつつ、フランス語の韻文を現代日本語の散文訳で再現しながらこの詩を理解してみることにする。

「征服者たち」　ジョゼ・マリア・ド・エレディア

故郷の墓場を離れる白隼（ハヤブサ）にも似た、
気高き貧困に倦んだ荷役夫や船長たち、
モゲルなるパロスから港を発ち
野蛮な英雄の熱に浮かされ、旅立った。

奴らは行く日出づる国（シパンゴ）が遥か彼方
鉱山に熟れさせる垂涎の金属を奪いに、
西洋の果て神秘の岸辺に
貿易風が帆桁を傾けた。

夜ごと明日の冒険を夢みて、
南海の紺碧に目を眩まされて、
黄金の蜃気楼に心奪われながら、

純白の帆船の前に身を乗り出し
奴らは見る海の涯てから、
見知らぬ空にのぼる新しい星々。[8]

ウイリアム・マルクスは謝辞を述べるよりも前にこの詩を読み上げ、その後に慣例となっている謝辞と、長年抱いていた文学教育への違和感を告白したのち、すなわち、読み上げられたエレディアの詩を味わう余裕を聴衆に十分与えたのち、満を持して、この詩を取り上げた意味について説明する。

私が読み上げた眩いばかりの詩、あらゆる名詩選や文学の教科書において最高の位置を占める、私たちの言語の中で最も高名な詩、フランス詩の不朽の名作は、「外国人」と呼ばねばならない人物によって書かれました。キューバ出身のジョゼ・マリア・ド・エレディアは、二十七歳で「征服者たち」を書いた時、母親こそフランス人でしたが、厳密にはスペイン臣民でした。彼はラテンアメリカで最初のロマン主義詩人となった同名の従兄弟ホセ・マリア・エレディアのようにスペイン語で卓越した詩を書くこともできたかもしれません。しかし私たちのエレディアは九歳でフランスに到着し、フランス国籍を取得する以前から長い間フランス語で書く詩人でした。かくしてフランス文学の歴史的遺産の中心という、全く外国人の姿を予期しない場所に外国人がいたのです。（八）

カリブ海やキューバ島を発見しつつある獰猛な征服者たちを語ることはエレディアの祖先たちがなしとげた大西洋横断への暗示的な賛美となると同時に、私たちが解読すべき、秘められた逆のイメージをも提出します。それはまるで鏡の中でのように、しかしより平和的に、正反対の旅程をたどり、西から東へと進みヨーロッパの岸辺へとたどり着き、そこに居を定め、新しい星々に彩られたフランス文学の天空の頂点へとのぼりつめ、新たな星座を輝かせた詩人自身のイメージです。（九）

芸術作品の美を味わう喜びのナイーヴな肯定。知的、冷静であることを旨とする研究者にとってはタブーとも見なされかねない芸術との素朴な接し方を、マルクスは臆面もなく肯定し、さらに「征服者たち」を読み上げることで、聴衆全員にこのことを納得させた。合わせて、このフランス語の宝というべき詩は外国人によって書かれたという事実を知らせることで、文学の世界ではナショナリズムを持ち出すべきではないことも同時に示したのである。国内文学と外国文学の境界は消滅し、比較文学が正面に登場する。

私がここで比較文学の講義を始めたいと望むのは、このような星＝記号（signum ラテン語で「星座」）、この好意的な星々のもとにおいてです。受け入れられた外国人の記号、同一性の中の他者、そして他者の中の同一性の記号、見たことのない空の発見、素晴らしい宝物の探求、遠く離れた文明間の刺激的であると同時に危険をはらむ出会い、あるいはまた生産的な誤ちの記号です。日本を発見したと信じてアメリカ大陸を発見した十五世紀の征服者たちの誤ちです。これから私たちは、錨をあげ、帆桁を傾け、私たちの文学の神秘的な限界や、古い習慣を乗り超え、外国文学の中へ、異なる遠い

テクストの探求へと旅立たなければなりません。クリストファー・コロンブスのように、彷徨いながら、我々が望んでいた宝とは全く異なりうる宝へとつながる道を発見しに行くこと。それこそが真に未知なるものへと向かう際、私たちが支払わなければならない代償です。（十一）

マルクスにとって作品の輝きは、文学研究の重要な対象である。「世界図書館」の中で読むことの究極の目的は、そのような輝きを放つ作品（＝星）を発見することである。またそのような他者は、過去や外国にのみあるのではなく、注意深い視線を持ってすれば、自らが属する文化の中にも存在している。それは同時に国別の文学が陥りがちな、あまりにも安易な対比への警戒でもある。

比較文学は様々な文学や異なる文化の間の比較にのみ存するのではありません。なぜならば探し求められた差異は、近くから見れば現実には、考察の対象となる文学や文化の中にすでに存在しているからです。この学問の悪癖として非難される硬直した比較研究のパラダイム、例えば国別の、あまりにも安易に対立させられるフランスとドイツなど、あらかじめ決められた対象を構築してしまうというパラダイムから私たちは脱することが出来ますし、脱しなければならないのです。古代から現在まで同一の集合の内部において文学的諸概念の共時的また通事的な可変性を考慮することで、私たちはそこから逃れることが出来ますし、また逃れなければならないのです。（四十）

ウイリアム・マルクスによると、「比較文学」の究極の目的は、人間を限界のない読者に作り変えることであり、そのような読者を彼は「文人（homme lettré）」と呼ぶ。[9]

もしこの講座が意味を持つとすれば、その目的は私たちを限界なき読者につくり変え、文学の問題を乗り越える力を持ち、文学を超えて読むことの出来る「文人」にするために、私たちが既に意識することなくにそこで生きているこの世界図書館を可視化することにしかありません。（七十三）

ここで言う「文人」とは精神の内側に「目に見えない」豊富な図書館を蔵するに至った読者のことである。文人は自己を相対化し、読む対象への敬意と慎ましさを持つに至る。マルクスによれば、現在中心主義に陥りがちな読者は、巨大な資料体、常に目には見えない「世界図書館」を内側に取り込んでいくことによって、文人へと変わっていかなければならないのである。しかしそれが容易に実現出来ることではないことは言うまでもない。

自己を根本的かつ決定的にはぎ取り、二十一世紀始めのフランス人読者という特定の視点の廃棄を試みること、それは天使として振る舞うことであり、不可避的にオルフェオとエウリディーチェのように、研究対象を掴んだと思った瞬間に失う結果ともなるでしょう。むしろこの見解を宙づりにし、それを客観化し、それを意識させること、それをずらし、修正し、この図書館のバベル的混沌を前にしての世界内での現

実的な場所、歴史の頂点にありながら単なる泡でしかない私たちという感覚を耕しつつなおそれを実践すること。私は比較文学の研究に与えられるこれ以上の使命を思い描くことは出来ません。（八十）

このように文学の記述を発展させることや正典の歴史を創ることは単に歴史を語ることや、学問を進めることではなく、作品の読み方を変えることです。プルーストを『クレーヴの奥方』との関係で読むか、あるいは『特性のない男』との関係で読むか、つまりフランスの心理小説の伝統の中で読むか、ヨーロッパ小説の近代における脱構築の伝統の中で読むかによって、それはもはや同じ作品ではなくなります。作品はそれ自体単独では存在しません。作品はわずかに知覚できるにすぎない「地」の上で、その中で意味をなし、私たちの理解を方向づける他の作品あるいは他のテクストから自らを浮かび上がらせます。あらゆる名作はそれを意味のシステムの中に閉じ込める系列をつくります。T・S エリオットによると、作品たちは読者の頭の中で、特定の位置をもち、新しい作品が加わるごとに再組織化される「理想的な秩序」をつくるのです。[10] アガサ・クリスティの小説『ABC殺人事件』を思い出しましょう。この作品で犯人は真の殺人の理由をごまかし、探偵に誤解を与えるため一連の殺人を犯しますが、それと同じように、あらゆる系列のテクストは意味をつくりだします。犯罪と文学の違いは、どのような文学も系列の中では独立していないということです。どのような作品も孤立しては読まれません。全ての読書は、意識するしないにかかわらず、比較された読書なのです。（四十五）

ところで、比較の持つこの想像的そして解釈的な力は、私に単なる歴史家としてだけではなく、文学者としても仕事をすることを強います。私にとって重要なのは、作品がどのように今日読まれ、明日読まれるかということです。ここに私の立場に特有の弱みと困難があります。私のすべての仕事は私の読書態度を歴史化することにあるのですが、歴史化することは抹消することではありません。私の文学への概念の相対性と歴史的な特異性、私自身のというよりも、私の属している時代と文化の、を感じれば、私自身の存在に固執することは出来なくなります。私は、かつて常にそれをしてきたようには本を読み続け、私の文学への好みを共有することはできません。この歴史的な距離と美学的な参加の皮肉な距離こそが、意味および想像力さらには学問的な生産性に富むと私には思われるのです。（四十六）

自己の相対化という究極の目的が示された今、この完全な宙吊り状態に人間は耐えられるのだろうか。多くの研究者が科学の方法を適応するに際し、客観化、すなわち視点の消去という問題に悩まされている。原理的には解決不可能なこの問題を前に、マルクスは自らを鼓舞し、進み行こうと決意する。[11]

さて私たちはこれほどまでに向こう見ずな展望へと進み行

く能力あるいはその権利を持つのでしょうか。一九二五年、ポール・アザールのコレージュ・ド・フランス教授候補の業績報告書において、哲学者エドゥアール・ル・ロワは同僚たちに次のような言葉で注意を促しました。「あまりにも早急な一般化の安易さ、この生まれつつある学問の誘惑を恐れましょう。やがて大いなる統合の時が訪れるでしょう、しかし今のところ私には深みのある仕事をすることが必要なように思われます[12]」。このような譲歩を表明しながら、ル・ロワは、競争相手よりも遥かに大きい、文学への国際的な視点を提案していたポール・ヴァン・ティーゲムの資格を取り下げさせようとしました。（四十三）

ル・ロワの慎重な警告はしかしどの時代にも存在します。もしエーリッヒ・アウエルバッハがそれを聞いていたら、彼は決して『ミメーシス』を書かなかったでしょうし、エルンスト・ロベルト・クルティウスも『ヨーロッパ文学とラテン中世』を書かなかったでしょう。ル・ロワのような人たちにとっては大いなる統合の時は未だ来ず、またそれは永遠に来ません。彼らは常にそこから慎重に身を遠ざけていなければならないからです。ところで、統合という向こう見ずな視点は、歴史や進歩のためには必要な知的行為です。恐らくそれは最初は不完全でしょう、間違いでさえあるかもしれません、しかしそれは、検討を促すため、乗り越えられるために存在するのです。統合が取り扱うべき対象は存在しています。なぜジャンセニストの慎重さでそれを黙殺してしまうのでしょうか。言うならば、手を汚れ油の中に突っ込むべきなのです。最初の仕事がうまく運ばなくても仕方ありません。最初に提案された下書きに基づき、後継者がより巧みに事を運ぶでしょう、それこそが重要なのです。（四十四）

このようにマルクスの計画は計算されつくされたものというよりも野心的なものである。失敗覚悟での「船出」はエレディアの「征服者たち」の描いたコンキスタドールの船出と重ねられてもいるだろう。「征服者たち」は日本に眠る黄金を夢見て、ヨーロッパから船で西へ向かい、偶然にもアメリカ大陸を発見したのである。そのような勘違いから生まれるかもしれない大発見こそが、ウイリアム・マルクスの目指すところなのである。

パラダイム・チェンジへの期待

さて筆者がウイリアム・マルクスの企てに寄せる興味はとりわけエピステモロジー的なものである。別の言葉で言えば、十九世紀の「比較言語学」から二十世紀の「構造言語学」が生まれたのと同じような道を、今後フランス（という一拠点を通じたヨーロッパ）の文学研究がたどるかという関心である。

同様な道をたどるとすれば、比較文学の後には、様々な文学の多様性を通じて把握された文学(性)――それは文化人類学的なものか、美学的なものか、精神分析的なものか、心理学的なものかはまだ分からないが――の研究が文学研究の目的とされるはずである。すなわち今後、文学の認識の歴史において、「比較」を通じ

て「構造」へのパラダイム・チェンジは起こるだろうかという関心である。

しかし少し慎重になれば、「構造」と「文学」との組み合わせには誰もが既視感を持つのではないだろうか。既に半世紀以上も前、一九六三年に出版された『ラシーヌ論』をきっかけに勃発した論争において、ロラン・バルトが提起し、ソルボンヌ大学の文学教授であったレイモン・ピカールが批判したのは、バルトの「文化人類学的」、「精神分析的」、「構造的」な文学へのアプローチであったのだ。ラシーヌのすべての悲劇を比較し、通底する構造を抽出するという方法論は、個々の作品の固有性や歴史性を無視することで成り立っており、当時の言葉ではテーマ批評（テマティック）とも称されたが、作品をその内側の構造において把握する点で構造主義的実践を先取りするものであった。

ソルボンヌはその後一九六八年に十二世紀以来の歴史に終止符を打ち、新制パリ大学に生まれ変わるが、数字を付与された実験的大学や高等教育機関で、ジュリア・クリスティヴァ、ジェラール・ジュネット、ツベタン・トドロフといった研究者たちが推進した文学研究は多かれ少なかれ構造主義、ポスト構造主義の名で呼ばれていた。

バルトがコレージュ・ド・フランスの「文学の記号論」講座担当に任命されたのは一九七七年、そのわずか三年後の一九八〇年にまさしくコレージュの前でクリーニング屋のトラックに轢かれたことをきっかけにバルトは死去してしまう。コーレジュでのわずか三年間の講義は「小説の準備」、「中性について」「新生」と、実際には文学の記号論とは異なるテーマが続き、あふれんばかりの聴衆を当惑させたが、当時バルトの近くにいたエリック・マルティらの証言によると、まさにコレージュの教授に任命された一九七七年に起こった母の死による喪失感からバルトは生きる意欲をなくしていたとのことである。実際彼の先鋭的な構造主義的研究・教育活動は、大学とは別の高等教育機関でのセミネールを通じて、六十年代から七十年台前半になされていたのである。フランスの高等教育機関の複雑さ（大学、国立科学研究センター、社会科学高等学術院、高等研究実習院）が幸いし、構造主義的文学研究はすでに半世紀以上にわたり大学ではない高等研究教育機関において着実に積み上げられていた。どちらかというと大学の側に位置付けられるコレージュ・ド・フランスの内部には、構造主義的文学研究は保守主義の壁に阻まれ二十世紀には導入され損ねていた。[13]

バルトが高等研究実習院で博士論文を指導した最初の学生がブルガリアから留学してきたジュリア・クリスティヴァであり、ジュリア・クリスティヴァがパリ第七大学で最初に博士論文を指導したのが理工科学校から文学へと専攻を変更したアントワーヌ・コンパニオンであった事実を思い出すと、バルトからちょうど二世代隔たり、外部者により育まれてきた前衛思想が十分に古典となった文化風土の中で教育を受けたウイリアム・マルクスは「構造主義」的アプローチを、複数形の比較文学の名のもとに、コレージュに再導入しようとしていると考えられる。[14]

しかしなぜこれほどまでに時間がかかったのだろうか。一九九五年に科学用語を人文科学の場で比喩的に用いることに警鐘を鳴らしたソーカル事件により、評判を落としたフランスのポストモ

ダニズムの影響が完全に消え去ったのちに再導入を行うためにはそれ相応の期間が必要だったとも考えられる。

また四十年前と現在の社会状況の差も当然無視できない。文学が社会に十分に根を張っていた四十年前であればまだ「作者の死」や「構造分析」、「二項対立」はいささかの余裕を持って迎えられもした。しかしフランス大統領自らが『クレーヴの奥方』無用論を語る時代を経て、また文学自体がインターネットや映画によって周縁化され、書かれた言葉を読むことはすでに絶滅の危機にさらされつつある今日、むしろテクノロジーに対するフォビアを克服し、インターネットはアーカイブとして文学と良好な関係を結ぶべきであり、（機械）翻訳は文献学の発展を促進するとする視点こそ採用すべきなのである、また映像への派生作品はオリジナルへの関心を刺激し、「幕（エクラン）」と「紙（パピエ）」は二者択一ではなく、新たな妥協点を模索しなければならないだろう。

折衷主義的側面は否定できないウイリアム・マルクスのアプローチだが、彼の登場は大学における古臭い文学研究者のイメージを一新し、文学をその最大の広がりにいおいて（つまり、映画や漫画という派生作品をも含みながら）読まれるべき対象と再定義する野心的なものである。

しかし、おそらくそのような拡張された「比較文学」的態度をもって「読む」ことによってのみ、私たちはグローバリズムが終了し新たな「分断」の時代となった現在、加速する文化の商品化――それはインターネット経由の動画配信の競争に形を変えて進行中である――に抵抗することができるのではないだろうか。

ウイリアム・マルクスの最近の活動

コレージュ・ド・フランスにおけるウイリアム・マルクスの『比較文学』の初年度（二〇一九―二〇二〇年）の講義は、新型コロナウイルスの感染防止のために教室に聴衆を入れずに行われたが、持ち前の陽気さで順調に授業は配信で進行された。その成果は *Des étoiles nouvelles*, Les Éditions de Minuit, 2021 として出版されている。そこに読まれるのはエレディアの詩に触発された「新しい星」というテーマをめぐって、『タンタン』から『スターウォーズ』までが参照される驚くべき博覧強記である。二年目のテーマは『不可視の図書館』（二〇二〇―二〇二一年）、現在進行中の三年目のテーマは『失われた作品を求めて』（二〇二一―二〇二二年）となっている。今年に限っても講義と並行するセミネール（演習）に招聘される人物も多彩で、同僚のアントワーヌ・コンパニオンがロラン・バルトの未完の作品について、小説家のパスカル・キニャールが「消失」について、ソルボンヌ大学で十七世紀演劇の教授を務めるジョルジュ・フォレスティエがモリエールのオリジナル版『タルチュフ』（国王ルイ十四世による上演禁止により失われていた一六六四年版）について発表するなど魅力的なプログラムが組まれている。セミネールには編集者や画商なども招聘されている。他にも、二〇二一年―二〇二二年にかけては、かつてブレノスアイレスでボルヘスに本を読み聞かせる仕事をしていたアルゼンチン生まれのカナダ人、アルベルト・マングエルが一年間の任期で招聘され、「諸言語と諸文化によるヨーロッパの創設」の

講座を運営している。これらすべての豊富なプログラムはコレージュ・ド・フランスの組織力によって可能となっていると言っても良いが、マルクスのイニシアチブと人脈が重要な役割を果たしている。驚くべきことにウイリアム・マルクスの活動はフランスにのみとどまらず、海外にも広げられており、二〇二二年一月には東京大学に招聘されていたが、残念ながらコロナ禍で実現しなかったことが最近告知された。

おわりに

現在ウイリアム・マルクスのコレージュ・ド・フランスでの講義が何年間続けられるかは発表されていないが、今後のコレージュでの研究・教育活動の核心は「就任講義」の中に素描されていると考えられる。最後に、ウイリアム・マルクスの「就任講義」の結論部分を読むことで彼の今後の研究・教育の方向性を確認することにしたい。

ポール・ヴァレリーはこの場所で次のように言いました。

「この講義の目的は教えることではなく、目覚めさせること――いくつかの事柄を簡単にすることではなく、反対に皆さんの前でそれをより困難にすること――問題を解決することではなく、問題を発見すること――皆さんが自由に歩き回っているところに、障害物をおくことです」[15]と。（八十九）

文学の核心に触れる問題を、危険を冒さずに提起することなどできません。そうであるならば私がここに答えよりも多くの問いとともにやって来たとしても驚くには値しません。なぜならば、比較文学――あるいは限界なき読書、または文学を超えた読書――とは、なによりもまず、問うことによる方法論だからです。それがもし当然視されている知識に疑いを引き起こすことが出来たら、深く根の張った習慣を不安定にすることが出来たら、すでに大きなそして十分な利益なのです。関係する知識の広さとコーパスの複雑性と多様性を前にしての慎重さと謙虚さという教訓を提起することができれば、すでに上出来です。比較研究とは――皆様、私はこの言葉をもって本日の講演を終えますが――比較研究とは不安のことです。（九十）

この不安はしかし孤独ではない。輝きを放つ作品が読者と共にあり、読者の精神の中には無限に広がる作品の記憶が世界図書館として蓄えられているからである。最大の広がりにおける文学の研究と教育から今後何が生まれてくるか、ウイリアム・マルクスに大きな期待が寄せられている。

注

（1）コレージュ・ド・フランスはフランスにおいて大学とは別種の国立高等教育研究機関である。歴史的には一五三〇年にフランソワ一世により王立教授団として、当時のソルボンヌ大学が禁じていたギリシア語、ヘブライ語、数学、アラビア語などを教える国王直属の研究・教育機関とし

て創設された。現在では受講は自由かつ無料、しかし学位付与は行わないという一風変わった教育機関であるが、ここに講座を持つことはフランスのアカデミズムでは最高の栄誉とされている。Docet omnia「全てを教える」が十六世紀以来標語として掲げられ、現在、自然科学から人文科学まで五十ほどの講座が用意されている。

（2）William Marx (2020) *Vivre dans la bibliothèque du monde*, Fayard, Paris. 以下のサイトで全文が読める：https://books.openedition.org/cdf/10167。また当日の講義を記録した動画もコレージュ・ド・フランスのサイトで公開されている。（筆者がマルクス氏に確認したところ、講義が一時間に収まるよう原稿の一部を省略したとのことであった。動画とテクストを対照させて確認したところ、書誌的細部が一部省略されているが、分量的にはきわめて少量であり、ほぼ全文が読み上げられている。）本文の引用文後の番号はインターネットで公開されている講演原稿のパラグラフ番号に相当する。なおシカゴ大学出版局が刊行する*Critical Inquiry*に英訳が準備中である。本稿での講義の翻訳は筆者による。

（3）ウイリアム・マルクス著『文学との決別――近代文学はいかにして死んだのか』（邦訳二〇一九年、仏語オリジナル二〇〇五年）塚本昌則訳、水声社、参照。

（4）ウイリアム・マルクス『オイディプスの墓：悲劇ならざる悲劇のために』、森本淳生訳、水声社、二〇一九年、（仏語オリジナル二〇一二年）参照。

（5）アンドレ・ラガルド、ローラン・ミシャール共著『十七世紀：フランスの偉大な作家、アンソロジーと文学史』（一九五〇年）、パリ、ボルダス書店、一九八五年版、二九五頁（『フェードルの告白』）。十九世紀：フランスの偉大な作家、アンソロジーと文学史（一九五〇年）、パリ、ボルダス出版、一九八五年、四三二頁（『万物照応』）［講義原註］。

（6）マルクスは、講義中でパスカル・カザノヴァの名は口にしないが、カザノヴァの唯一の邦訳文献『世界文学空間――文学資本と文学革命』（岩切正一郎訳、藤原書店、二〇〇二年（原著一九九九年）は日本ではフランス系世界文学論の代表作とみなされている。しかしこの大著は日本語版の副題に見えるように、ブルデューの社会学を文学制度の分析に応用したものであり、同時にパリがフランスの都市であることをやめ、世界的な文学空間を提供するに至った歴史を描いている。そこにパリ中心主義を見る視点も存在するが、むしろパリの脱フランス化、虚構の舞台の出現こそが中心的に論じられている。カザノヴァの世界文学論との関連では、むしろグローバリズム期の文学流通を支配的言語と翻訳の問題の歴史とともに論じた遺作Pascale Casanova (2015) *La langue mondiale : traduction et domination*, Seuil, Paris.『世界語：翻訳と支配』（未邦訳）こそが興味深い著作であると思われる。

（7）「どのような思考も翻訳不可能なわけではなく、そしてこの無限に改善しうる翻訳というものは、時には翻訳されなかったものを明らかにするために注釈や補注を用いることもできます。テクストにはそれが生み出された共同体によってしか理解されないという意味での土着性は存在しないのです。」（八十三）

（8）ジョゼ・マリア・ド・エレディア「征服者たち」（一八六九年）、詩集『戦勝碑』（一八九三年、百十一頁）に再録、パリ、アルフォンス・ルメール社［講義原註］。この詩はすでに上田敏訳『海潮音』（一九〇五年）の中に「ホセ・マリア・デ・エレディヤ」作「出征」として翻訳されている。本稿では講義の内容を考慮して新たに拙訳を試みた。原文ではソネ形式（二つの四行詩句と二つの三行詩句からなる十四行詩）、各行はアレクサンドラン（十二音綴詩句）、ABBA, ACCA, DDE, FEFの脚韻を踏んでいる。上田訳は七五調であったが、本翻訳はオリジナルの行数のみ尊重した散文訳だが、稚拙ながら脚韻構造の再現を試みている。上田敏の師であったラフカディオ・ハーンは東京帝国大学英文学科在職中にエレディアの詩を紹介していたことが確認されている（Cf. *Complete lectures on poetry by Lafcadio Hearn*, Ryuji TANABE, Tesisaburo OCHIAI and Ichiro NISHIZAKI, Tokyo, The Hokuseido press, 1934, 中島淑恵（二〇一六）「エレディアを読むハーン」『日本フランス語フランス文学会中部支部研究報告集』№40、二〇一六年十二月九三―一一四頁を参照）。上田はハー

ンの授業に出席しており、詩人の選択にはハーンの影響が窺えるが、上田が『海潮音』に訳出したエレディアの三編はハーンが紹介したと記録されている詩とは異なっている。

(9) ウイリアム・マルクス『文人伝――孔子からバルトまで』、本田貴久訳、水声社、二〇一七年（仏語オリジナル二〇〇九年）を参照。

(10) ［原註］T・S エリオット「伝統と個人の才能」（一九一九年）『随筆選』ロンドン、フェイバー・アンド・フェイバー社、一九五一年、一五頁。

(11) このパラグラフ四三と四四は就任講義では時間の都合で割愛されたが、ウイリアム・マルクスによると印刷されたヴァージョンが最終的なヴァージョンということである。

(12) エドゥワール・ル・ロワ「南ヨーロッパとラテンアメリカの文学の比較史講座担当者報告書」（一九二五年）コレージュ・ド・フランス、アーカイヴ、コート二、AP一三、二〇頁［講義原註］。

(13) クリスティヴァやコンパニオンと違い、ウイリアム・マルクスはバルトを直接知る世代ではないが、彼はもちろんバルトをその作品を通じて知っており、開講講義においてもバルトの名を二度引用している（パラグラフ三八と六四）バルトに比べて理論的でないとされるピカールの側にも明示されていない理論があり、すべての読者は理論家だという文脈においてと、バルトの「言語がファシスト的である。それは語ることを強いる」というコレージュ・ド・フランス「就任講義」の引用を通じてである。

(14) ウイリアム・マルクスのポストが創設される直前の一九九五年から二〇一六年までは「フランス中世の諸文学」という講座が設置されており、中世文学者ミシェル・ザンクが二十年間教授を勤めていた。またマルクスにポストを譲る形で、同じように二十年近く勤めていたアントワーヌ・コンパニオン（二〇二二年二月末にアカデミー・フランセーズ会員に選出された）の「フランス近現代文学」の講座（二〇〇六年―二〇二一年）カルロ・オッソラの「ロマンス語圏の近代文学」の講座（一九九九年―二〇二〇年）が相次いで終了するため、今後はウイリアム・マルクス一人が、コレージュ・ド・フランスで文学を代表することになる。

(15) ［原註］ポール・ヴァレリー『詩学講義』一九三九―一九四〇年、フランス国立図書館、手稿部門、NAF 19100, f. 53 v°